

朝早く、別府を出発して、阿蘇の駅に着いた。

歓迎のブラスバンドを受けた。

年寄りが多いが、若い子も何人かいる。

親子かなあ。  
かわいい女の子もいる。

大変演奏がうまい。  
まるで、京都会馆で、演奏しても、はずかしくない。

「僕らみたくなもののために、よおやってくれるなあ。  
いや、ちがう、  
皆さん、好きで、楽しくやっているかも。

これは、趣味や、仕事じゃない。  
音楽の好きな人の演奏や。

これは尊敬に値する。」  
聞きほれながら、僕はそう思った。

バスに乗り、つれて行かれるままに、  
考えることもなく、初めは、ぼーとしていたが、  
窓の外の雄大な景色を見ていて、はっと思った。

「へえ、あの山々が、外輪山か。

この火口は大きい、その中にいるのか。

陥没する前は、

本当に、富士山どころじゃない、  
高くて、でっかい火山だったかもなあ。」